

第5課

キリスト教経験 は妥当か

著名な医師であり精神分析医のポール・トゥルニエ博士は、彼の『人格のいやし』という本の中で、個人的な問題を多くかかえた男性の患者のケースを語っています。その問題の中には、アルコール中毒の父、彼のためによく計画された職業、わずか結婚1年後に遭遇した彼の妻の死、再婚の葛藤、経済問題がありました。

トゥルニエ博士の検診中に、この青年はイエス・キリストの前に導かれました。彼は心を開き、非常に深い次元で彼の必要を分かち始めました。「この宗教的経験は彼の肉体的状態を目に見えるほど改善しました」とトゥルニエ博士は言っています。しかし、この経験はすぐには彼の問題のすべてを解決しませんでした。なぜならば、「宗教経験は、どんなに深くても、人生の諸問題を一度に解決するものではないからです」。数年の不確かな発展後、やっとこの男性はキリストを信じることによって家庭を築き、本当の幸福を見つけました。トゥルニエ博士はこの例に基づいた実際的な忠告をいくつか語っています。

「経験は、あたかも霊の飛躍が問題のない道徳生活と完全な肉体と精神の健康を保証するすべてであるかのように、過度に単純化したアプローチを許さない。にもかかわらず経験は、人間の肉体的、心理的状态がいかに霊の領域だけ勝ちとられる勝利に依存しているかを示している」

この同じ本のあとのほうで (P.240)、トゥルニエ博士は指摘しています。

「……宗教経験は単に幸福感の問題ではない。一度最初の熱心さが過ぎてしまうと、その経験は人間の精神的バランスに有益な実を結び、人生に具体的な結果をもたらし続ける。これらの結果が重大な欠点、和解、道徳的不規律の終結の告白を含むとき、その効果を自己暗示によってもたらされた幸福感に帰することは幼稚なこととなろう」

今日、個人的な宗教経験を単に松葉づえ、弱さのしるし、逃避の形として説

明しようとする人が多くいます。しかし、実際は真のクリスチャン経験は、それとは反対のもの、確固としたイエス・キリストへの信仰と献身をもって人生をあるがままに見つめることに導きます。イエスに対する個人的な宗教経験は、人生に新しい次元をもたらします。というのは、神と人間が意味深い相互関係に入れられるからです。この出会いは一度限りの経験ではなく、継続的な交わりの出発点です。その出会いと共に、さらに良きものに向かっての根本的な変化が始まり、そこから神の霊の力によって漸進的変革が展開していきます。私たちの問題や困難さは重要でなくなり始め、処置できるようになります。なぜなら、神は私たちの助け主であり、聖霊は私たちを力づけ、徐々にではあるが確実に私たちは、事実可能性として持っているもの、すなわち神の子になっていくからです。

学課のアウトライン

- 経験だけでは不十分
- 信仰の4段階
- 宗教的回心
- 回心の顕著な例
- 意志の人
- 挑戦
- 出会いの意味するもの

思考のための問題

1. あなたは個人的な宗教経験にどれだけ価値をおいていますか。
2. 主観的な経験は客観的な現実とどのような関係にありますか。
3. あなたは信仰の異なる段階を持つことができると考えていますか。
4. 大部分の宗教によって理解されている「宗教的回心」と、キリスト教によって理解されている「宗教的回心」との真の違いは何ですか。
5. あなたは宗教経験としての回心を自分で定義することができますか。
6. 「潜在的潜伏」という言葉は、宗教的回心について、あなたに何を意味していますか。
7. あなたは、ここで話しているような意味でクリスチャンと思われる人を、個人的に知っていますか。
8. あなたはこれまでにクリスチャンになろうと真剣に考えたことがありますか。

用語の意味

- 背教 — 宗教的信仰を捨てること
- キリスト教の回心 — キリスト教をはっきりと決定的に受け入れた結果に伴う経験
- 客観的 — 個人的反省や感情から離れた、現実の性質を強調したり表現すること
- 新生 — 再生される行為。霊的刷新。次善への根本的变化
- 主客的 — 個人的に知覚された現実に属すること。個人の精神的特徴や状態によって条件づけられる経験や知識

学課の展開

ひとりのえらい役人が2大都市の間の大通りを旅行していました。彼は、1つの許可状を持っていました。それには、クリスチャンを見つけ次第、彼らをエルサレムの権威筋に連れ戻す権限が記されています。目的地にさしかかったとき、突然、何の警告もなしに、彼は明るい光に囲まれました。その役人は地に倒れ、同伴の者たちは立ちどまりました。彼は自分の名前を呼んでいる声を聞きました。「サウロ、なぜお前は私を迫害するのか」。びっくりしたサウロは尋ねました。「主よ、あなたはどなたですか」。答えが返ってきました。「わたしはお前が迫害しているイエスである。立って、町に入りなさい。あなたのすべきことがそこで教えられるであろう」。

彼の旅の同伴者たちは、ものも言えないで立っていました。彼らは声を聞きましたが、だれも見えませんでした。サウロは、ふらふらと地面から立ち上がりました。彼は目をあけていましたが、何も見えません。彼は残された旅を人に手をとられて続けなければなりません。サウロは、この経験によって、人格の根源がゆさぶられました。3日間、彼は見ることができず、食べることも飲むこともできませんでした。気の進まない使者（彼が捕えようとしていたクリスチャンのひとり）が、神によって超自然的に啓示された教えをもって来るまで、彼はずっと祈っていました（使徒9：1—25参照）。

目が見えなくなったことと断食したことは一時的なことでしたが、ダマスコ途上でのキリストとの出会いは、彼の生涯を永遠に完全に変えました。彼の人生は、きわめて短期間にそっくり変革されました。サウロはあとで使徒パウロとして知られるようになりました。彼がキリスト教に貢献したことは、主イエス・キリストご自身を除いて、おそらくだれも彼をしのぐ人はいないでしょう。

この種の劇的な宗教経験は原則というよりも例外ですが、そのことはその経験の妥当性を決して否定するものではありません。その結果であるパウロの献身と、あとでキリストの故に耐えしのんだ苦難は、このことを証明しています。しかし、どうしてそのような変化が起きたのでしょうか。なぜなら、彼は神・人であるイエス・キリストに個人的に、劇的に出会ったからです。

もうひとりの重要な役人は、エルサレム訪問後、帰途に向かっていた。彼は真理を探求していた非常に宗教的な人物でした。彼はエルサレムで彼の問題の答えを受けられると思いました。しかし、彼は馬車を走らせながら、まゆをひそめて聖書の巻物を読んでいました。専門家が聖書を彼に解き明かすことができないのなら、彼はどのようにして理解できるのでしょうか。神はどこにいるのか。「苦難のしもべ」について彼が読んでいた預言の意味は、何も答がないのでしょうか。

彼のこうした考えを、ひとりの通行人がさえぎりました。彼は実際に問題をかかえている役人を助けようとしていました。2人はやりとりをしているうち、この男はわかりにくかった聖句への鍵をにぎっていることが明らかになりました。彼はイエス・キリスト、神の御子を知りました。役人はその見知らぬ人がイエスについての事実を語り、そのことを彼の個人的状況に関連づけるのを、注意深くまた熱心に聞きました。ここにそれらの問題に対する解答がありました。ここに真理がありました。

その役人は——私たちは彼の名前を知りません。ただ彼がエチオピア政府の役人であったことだけしかわかりません——パウロのようなイエス・キリストの幻を見るような経験をしませませんでした。しかし、彼もまたイエスとの真の出会いを経験しました。知的な理解から、彼は意志の行為に移りました。彼はイエスに対する完全な信頼の現われとして、最も身近なオアシスで洗礼を受けました。彼は、その見知らぬ人（伝道者ピリポ）から離れると、造り変えられた人物となって、喜びにあふれて家路についた、とされています。彼の知性は

満たされました。彼は人生の目的と存在理由を見いだしたのです（使徒 8：26—40^b参照）。

エチオピアの役人におけるイエスとの出会いは、劇的ではありませんでした。しかし、その結果は、パウロの場合と同じように、超自然的であり、根本的なものでした。その出会いは彼の人生を変革しました。この意味で、それは有効性をもった経験でした。それ以上でもそれ以下でもありません。

経験だけでは不十分

すべての宗教的経験が有効なのでしょうか。私は宗教経験そのものを弁護しているわけではありません。あるクリスチャンの著者は率直に言っています。「経験だけでは、キリスト教体系がよって立つ土台としてはあまりにもろい。宗教的感情はそれだけではそれ自体を証明することしかできない」（ピンコック P.69）。もし私が自分の個人的経験だけを土台として、神は存在すると断言するなら、私の断言は客観的な根拠のないものとなるでしょう。主張できることは、私はある種の経験をもったということではしかありません。その場合、私に起きたと私が感じていることに焦点がしぼられ、何を神が語り、行なったかという客観的実在はばかされてしまうでしょう。主観的経験の背後には、それを支持する客観的実在がなければなりません。

確かにクリスチャンは主観的経験の妥当性を信じています。キリスト教はユニークな経験で満ちていますが、私たちは経験だけに、あるいは経験のための経験に訴えることはしません。妥当性をもった宗教経験は真理に基づき、神の言葉によって支持されなければなりません。キリスト教の特異性は、聖書が示しているように、イエス・キリストの人格とわざなのです。

実用主義の哲学には多くの欠点がありますが、1つの長所もあります。「真理と見なされることは、すべて人生と経験に直接触れなければならない」（ラム P.208）。「人生と直接接触すること」は、それは人生と経験にタッチし、関連し、直結しなければならない。

私たちは今、非常に一般的な言葉で話しています。もし私が宗教経験を持ったなら、その経験は有効であるかも、ないかもしれません。経験にはあらゆる種類の経験があり、ほとんどすべての宗教は何らかの経験をあげることができます。経験からの議論は、麻薬の使用を正当化したり、魔術に加わったり、禅の価値を認めることを正当化するために用いられます。前述したように、キリスト教は、経験のために経験に訴えません。キリスト教は、そのうちに極端から自らを守るための抑制と均衡のシステムを持っています。個人的な宗教経験（主観的な性質のもの）は、聖書に書いてあることによって実証され、確認され、支持され、検査され、神によって承認されなければなりません。

宗教的経験を評価するために、どのような証拠があるのでしょうか。これには、2つの重要な質問を自問してみるとよいでしょう。まず「この主観的経験に相当する客観的実在は何か」ということです。「聖書に示されたイエス・キリスト」によって第1の質問に答えることができるなら、次に、「この同じ客観的実在に関連した同様の経験を持った人たちは、他にどれだけいるだろうか」と問うてみることで。さて、この2つの証拠を、ダマスコ途上のパウロの経験とエチオピアの役人の経験にあてはめてみましょう。

第1に、パウロの経験は何かの客観的実在と一致したでしょうか。はい、一致しました。彼にとって、その実在はイエス・キリストでした。それ以後、彼は、その日の出来事を語るとき、彼の経験と復活のキリスト、また悔い改めと従順への主の召しを関連づけました。エチオピアの役人は、幻を見ず、声も聞きませんでした。ピリポが彼に「イエスの良い知らせ」を語ったのです（使徒 8：35）。しかし、彼はこの教えを受けると、「私はイエス・キリストを神の子

と信じます」と断言して洗礼を受けさせてくれるようにたのみました（使徒 8 : 37）。彼の出会いについては、これ以外のことはわかりません。伝説によると、彼はエチオピアに帰り、イエスのメッセージを伝え、その結果、エチオピアにキリスト教会が建ったということです。

第 2 に、他の人でイエスにつながる同様の経験をした人がいますか。はい、そういう人は多くいます。これまでに記したこれらの出会いの最も重要な部分は、人生の完全な変化であったことを思い出して下さい。変えられた人生は、各々イエス・キリストの实在と力の証拠を加え、歴史のページは彼に出会った後、人生の方向が変えられた多くの人の例で満ちています。パウロの出会いに伴った肉体的現象はユニークでした。その現象はまたすべて一時的なものでした。しかし、彼の人生の変化は永遠のものでした。イエス・キリストとの個人的出会いは、そのような特異な外側の感情を伴うかもしれないし、伴わないかもしれません。エチオピア人の経験にはもっとそういうものがあるかもしれません。しかし、そうであっても、それは常に人生を変える経験です。証しからの証拠は驚くべきものがあります。私たちはそのいくつかをあとで見ることになります。

信仰の四段階

宗教的回心の具体例を論じ、そのような例を他にあげる前に、私はまず本物だと確立しようとしている回心を強調しなければなりません。米国の心理学教授であるウォルター・ハストン・クラークは、宗教的信仰は「宗教的進歩の最も微妙で重要な問題の 1 つである」と、言っています（クラーク P.219）。それは、ただ座って、それについて考え、ある程度人に受け入れられる結果に達し、そのことの上に信仰を建てる以上のことをします。理性には適切な役割がありますが、それは私たちがキリスト教について言われていることのすべてで

はありません。

表面的には、それは人が宗教的であれば、発見しやすく見えます。ちょっと聞いてみて下さい。調査員、学者、国勢調査員はこれをくり返し行なって、ほとんどの人は少なくともある程度まで神と死後の命を信じる「信者」であることを知っています。しかし、もし私たちが宗教的信仰の事柄をもっと詳しく調べてみれば、「状況はもっと複雑であることがわかります」（同 P.220）。それ故、私たちの研究にとって、クラーク博士が信仰の四段階と呼んでいるものを考察することが大切です。

第1段階：単なる言葉としての信仰

彼の最初の段階は、専門的に「刺激——応答言語」と呼ばれるもので、言語の力と使用に深く関わっている信仰です。多くの人の「信仰」はこの言語的段階のもので、宗教は単に語句であり、利他的概念を表現する方法であり、超越の象徴となります。この段階での信仰ないし宗教経験は、人生や行為にとってそれほど重要なものではありません。人はこれを持つことも捨てることもできます。どちらでも大した違いにはなりません。

第2段階：理解としての信仰

クラークが「知的理解」と名づける第2の信仰段階は、非常に一般的な機能の段階です。このカテゴリーの中に、神の存在のいろいろな証明（第2課で「指示するもの」と名づけたものを思い出して下さい）が入ります。理性と論理が主な道具です。しかし、それだけに頼るなら、不完全なものです。この種の信仰は「人生と関係がなく、少しも人生に影響を与えません」（同）。

もちろん、理性は信仰の成長に欠かせませんが、意志と感情も伴わなければなりません。聖書は、私たちは神を世における神の働きを理解することができ

るし、理解しなければならないことを強調しています。多くの御言葉は、はっきりとこのことについての神の立場を述べています。「神は、ソロモンに非常に豊かな知恵と英知を与えられた」（Ⅰ列王記4：29）。「主が知恵を与え、御口を通して知識と英知を与えられる」（箴言2：6）。理性の働きが神に近づくと上で重要であることを示唆する聖書の励ましは、文字通り多くあります。使徒パウロは、コリント人たちに「兄弟たち。物の考え方において子どもであってはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい」（Ⅰコリント14：20）とすすめて理性の重要性をくり返しています。

知的理解は、意志と感情から切り離されるとき、人格神に結びついて人生を変えざる経験を与えることができない点で弱いものです。

第3段階：行動としての信仰

この信仰の段階は、「行動の現われ」と呼ばれるもので、知的理解と行動とが一緒になったものです。クラークは言っています。「人間の行動は言葉以上に、はっきりと彼の真の信仰を現わしている」（クラーク P.233）。この種の信仰の古典的な例は、良きサマリヤ人についてイエスが語った話の中に出てきます（ルカ10：25—37）。ここには、人間の尊厳を知的に信じただけでなく、その信仰をあわれみの行動によって現わした男が登場してきます。キリスト教に関する限り、これは真の信仰に非常に近いものです。信仰から出た実践的な日常生活は、妥当性をもったクリスチャン経験の確かなしるしです。

キリスト教の信仰に関して言えば、この段階の主な問題は、それが価値ある道徳的ないし人道主義的規準を具体化している信仰であれば、それらが主イエス・キリストを信じる個人的信仰に関係していても、していなくても、どのような信仰にも有効となりうるということです。「道徳的行動がとられるときでさえ、私たちはその根底に確かな宗教的確信があることを、決して確かなもの

と感じていない」(クラーク P.223)。

第4段階：統合としての信仰

「理解力ある統合」と呼ばれる第4段階は、「理解としての信仰」と「行動としての信仰」を一緒にして、イエス・キリストの中に啓示された個人的信仰と真理への献身とに統合されたものです。前の3つの段階は部分的なものでした。1つの段階だけでは不十分です。

「言葉による確信が批判的、創造的思考によって良く理解され、全体が行動と良く統合して人間嫌いの観察者にさえも完全に納得のいくような形態をとるときのみ、信仰はまったく健全なものとなり、すぐれたものとなる」(同)。

成熟した信仰をもった人は、彼が理解している真理に立って行動し、むずかしい質問に対する答えを捜し続ける人です。彼は理想と実践とを結びつけ、理想的人物像を描いて自己の信じるべきことの首尾一貫したパターンを発展させます。オーロ・ストラック博士が言ったように、「私たちの神学は私たちの心理学にならなければならない」のです(ストラック, P.140)。このことは成熟した信仰、成長した信仰、事実の上に建てられた信仰を表わしています。それは、歴史を中心とした信仰であり、現実にも根ざした信仰です。その信仰は、人生に対して現実的であり、同時に、神の目的を地上と神に心を開く個人の生活の中に達成できる、神の能力に対して完全な信頼を言い表わす信仰です。これは、目に見える一時的なものを超えて、目に見えない永遠的なものに及ぶ拡大された実在概念の伴った信仰です。あなたもこの信仰の段階に進むことが、私の願いです。この信仰については、これから宗教的回心としてもっとくわしく論じなければなりません。

宗教的回心

この章で語られている宗教経験は、一般的に回心として知られています。ある心理学者は、宗教的回心を単に過渡的なものと見ています。何かを探求している人は、自己の主張よりも自己の気に入った新しい思想体系を見いだすので、その新しい思想を受け入れます。それは急激な決断であるかもしれないし、ゆるやかな決断であるかもしれません。この一般的な意味で、回心は宗教に向かうと同じぐらいやすく、宗教から離れることもありえます。背教、つまり信仰を捨てることは、受容と同程度の回心経験といえます。実際、この回心という言葉は、宗教的ではない関連性の中で適用されます。たとえば、人は右翼の政治団体から左翼のそれへ転換することができます。あるいは、ある人は徐々に、無政府と革命への献身から民主主義と平和な妥協へと態度を変えることもできます。どちらの場合も、ある種の回心経験が含まれています。

霊的回心はもっと複雑です。そこには1つの価値体系から他の価値体系への移行が存在するとはいえ、霊的回心は単に過渡的なものではありません。そして、回心は各自にとってユニークではあるが（人間はみな違いますから）、回心のプロセスの段階は認識できます。最初の2つの段階は別々にあげることが困難です。どちらも最初に起こる場合があるからです。そこで、第1、第2段階は、「不安」の期間とある心理学者が言う「潜在潜伏」期間を含むと言えましょう。

不安の期間中には、無価値感、不完全感があります。それは人生に何かが失われているという不思議な感覚です。そこには、無意味の感情、意気消沈、絶望が起こるかもしれません。潜在潜伏の期間には、精神の中に、ダイナミックな宗教的信仰にこそ人生の大問題に対する唯一の答えであると、ゆっくりではあるが確かに気づかせるようなほのかな要因が働きます。両方の場合、イエス・キリストを受け入れることは、取られなければならない論理的、必然的、

適切な段階として見なされます。

あなたは今、この段階にいるかもしれません。あなたは何かの答えを見つけようとしてこの本を読んでいることでしょうか。もしあなたが人生に神を迎え入れて神に働いてもらうなら、私がこの本を書いたからというのではなく、ここで論じられてきた項目があなたを助けるので、あなたは正しい方向に進んでいるのです。

第3の段階は、危機あるいは決断の時です。不安や潜伏の期間がどんなに長くても、あるいは短くても、「回心の出来事は究極の関心をもつ危機においてははっきりと現われるものです」（ジョンソン、P.117）。回心の出来事は、問題に対する答えと不安からの解放が個人的に受け入れられる瞬間です。それは神がいつもおられたことを思い返し、認識することです。それは未来を見つめて、神がそこにもおられることを認めることです。最後に認めることは、神は現実におられるということです。私たちは逃げるのをやめます。私たちは知的な隠れん坊のゲームをやめます。私たちは道徳的、霊的立場から逃げ出す道を合理化するのをやめます。私たちはイエス・キリストの死と復活を通して喜んで神に見いだされ、愛され、変えられるようになります。

ポール・トゥルニエは、彼のユダヤ人の友人の話をしてしています。彼はその友人と数か月にわたって話をしました。この友人は、霊的実在を求めていました。2人は長い間やりとりしましたが、何の結論にも達しません。ある日、その友人はトゥルニエ博士のところへ行って、彼がこれまで捜していた実在としてキリストを見いだしたと言いました。その友人はクリスチャンに会ったのです。彼はクリスチャンに「知的大食家」と言われました。この言葉で彼は、自分を非常に深くさぐるようになりました。彼は、必要なものはキリストに自己を明け渡すことだけであり、そうすればすべてが落ち着くと気づきました。トゥルニエは、友人の経験を次のように要約しました。

「彼は良心をさぐったとき突然、果てしのない宗教的論議は、どんなに興味深いものであっても、一種の禁欲にしかすぎず、回心の道を閉ざすものだ、ということがわかったのです」（トゥルニエ，P.114）。

悟って受け入れる瞬間は、人によってまちまちです。ある人々は、それに肉体的現象が伴います。偉大な英国の牧師ジョン・ウェスレー（1703-1791）は、彼の回心を「不思議に心温まる」経験として説明しました。他の人々は、心理的な現われが伴います。ある人はそのことをこのように言いました。それは「まるで命の奔流が、突如私に注ぎ込まれたようであった」と。ほとんどの人にとって、感情面に変化があります。彼らは平安を感じます。愛されていることを感じます。喜びに満たされます。これらの個人的経験は素晴らしいものですが、その経験が客観的実在と一致しなければ有効ではありません。根本的な変化はそれぞれの人生に起きます。聖書は、変化に伴う特定の現われを約束していませんが、この変化そのものは約束しています。実際に起きることは「新生」ということです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました」（Ⅱコリント5：17）。聖書はこのことを、他の多くの言葉で言い表わしています。たとえば、生まれ変わり、神の子としての身分を与えられる、信仰による義、神との和解、新しい命の賜物、解放などです。

これらの言葉はすべて、回心の出来事は終わりであり始まりであることを示唆しています。潜在潜伏と不安は新生（出来事）に道をゆずり、新生はその次に成長と成熟に導きます。連続性は回心の最終的段階ですから、それは生涯続くものです。ある新しいクリスチャンは、回心にバラ色の残光を経験します。2,3日はすべてのものがすばらしく感じられます。しかし、宗教経験は瞬間的に問題のすべてを解決させるのではない、と言ったトゥルニエの警告を忘れてはなりません。

では、この経験にどのような良い点があるのでしょうか。第1に、クリス

チャンにとって人生は、喜びと悲しみの断片的寄せ集めではなく、統一のとれた意味をもったものになります。第2に、痛みと問題は、それらをいやし取り除く力と知恵をもった神、私たちがそれらと取りくむ際に助けを与えてくれる神と分かち合うことができます。第3に、問題があるにもかかわらず、神がおられ、生きる根拠が与えられているので、心に平安があります。第4に、イエスが共にいる友であり、クリスチャンの仲間も与えられるので、孤独でなくなります。第5に、神の言葉は、その場限りの答えではなく、首尾一貫した統合されたライフ・スタイルのための規準を与えてくれます。最後に、クリスチャンの時間の見方は永遠を視野に入れるために、逃避することなく、不可解な挫折や不正に直面することから来る緊張から解き放たれます。

私は、回心で、経験だけの宗教を話しているのではありません。そういう宗教は、あなたに起きることやあなたが感じるものが最後のな権威になります。決してそういうものではありません。経験の宗教は、それだけで神学の緊張と知的探求のチャレンジを避け、単に関心があるときだけ受け入れるような一時的な流行となってしまいます。R・A・ノックスは『熱心』という本の中で、経験だけに過度に頼り過ぎた信仰の落とし穴を雄弁に明示しました。しかし、経験を含まからという理由だけで、信仰を拒絶してはなりません。

回心の顕著な例⁹

クリスチャンの回心の妥当性に対する証拠は、あらゆる国、文化、時代の人々が同じ経験をしているということです。もう1つの証拠は、その回心は効果があるということです。クリスチャンの回心のインパクトを説明し、証明するために、無数の実際例をあげ、記録をとり出すことができます。ここに選び出した例は、異なる文化、異なる背景、異なる出発点、異なる人格を示しています。彼らの回心の構造はまちまちですが、その効果は同じです。そこにはイ

エス・キリストを中心にした新しい世界観、新しいライフ・スタイルがあります。

〇・ハレスビー教授（ノルウェー）

故ハレスビー博士は『なぜ私はクリスチャンか』という本を書きました。この本は、素朴に直接的に自己を表わした本で、逃避と疑いから堅固なキリスト教信仰に至る霊的冒険が記されています。彼は、もし人が自分の経験からクリスチャン生活を知らなかったとしたら、知的困難さが彼を直ちに懐疑的にさせる、と確信しました。

彼にとって、疑う人たちは2種類ありました。1種類は「疑いの中で生きている人が、良心の責めから身を隠すような疑い」でした。疑いの種類は、決して論理的議論によって打ち勝つことはできない、と彼は信じました。なぜなら、それは理性よりも感情に根ざしているからです。個人的経験だけがそのような懐疑者を信仰に導くことができます。彼によると、2番目の種類の懐疑者は、その疑いのゆえに痛み苦しみ、真に不確かなものに飽き飽きしているような人です。彼はこれが自分の立場だと感じました。彼は「確かなものを知りたい」ということについて知的に正直でした。彼が次のように言うとき、正直な懐疑者に彼が同情しているのが良くわかります。

「私もいろいろな疑いの状態を通過してきました。私はその昔、悩みを感じてきました。しかし、私は疑いから脱出して信仰に至る道をも知っています。その道はすべての疑う人たちに開かれているもので、私たちのどのような人間の機能、私たちの理性の力をさえ害さないものです。」

ハレスビー博士は、疑いから脱出する道を見いだしました。彼がまったく正直に真理を知りたいと願ったからです。聖書は、心から知りたいと願う者は知るようになる、と教えています。「だれでも神のみこころを行なおうと願うな

ら、その人には、この教えが神から出たものか、わたしが自分から語っているのかがわかります」(ヨハネ7:17)。ここで、イエスは経験を土台に個人的な確信を与えると約束しています。唯一の条件は、心から神の御心を行なおうとすることです。

これらのイエスの言葉は、疑いについて非常に大切なことを私たちに教えています。それは偉大な知的、教育的業績によるものではありません。もう一方の極端な、知識が足りないから真理はわからないのだ、と感じる慎み深さによるものでもありません。「あなたの疑いの原因はまったく別なところにあります。あなたにはある種の経験がありません。そのためにあなたは疑いと不安定の中に置かれているのです」とハレスピーは言っています。

この人の回心は使徒パウロのようにあざやかなものではなかったのですが、その回心は明確で完全なものでした。エチオピアの役人のように、彼は心から真理を知りたいと願いました。そして、この知識はひそかに、それでいて確かに彼に与えられました。彼の生涯は、彼に起きた変化を説明しました。彼が経験した回心の結果、また彼が人生の意味を見だし、問題の答えを発見した結果、彼は心から真理を求めている人を助けることができたのです。

サドー・サンダー・シング (インド)

サドー・サンダー・シングは、イエスの幻によって人生が変えられた最近の例です。かつてはクリスチャンたちを激しく迫害したインドの青年サンダー・シングは、20世紀の最も驚くべき福音の働き人のひとりになりました。

有名な家庭のシーク教徒として、サンダーは非常に宗教的でしたが、彼の宗教は彼の実在探求を満たすことができませんでした。彼の若い時代、人生は絶望に満たされていました。彼の母が病気になり、死んだことは、彼の絶望を深めました。彼は真理の啓示を待って、3日3晩部屋に閉じこもることにしまし

た。もしきまった時間にだれも来なければ、彼は特急列車の線路に身を投げようと思っていました。

何も真理の啓示がなく、3日3晩が過ぎました。死の決意の前にあと数時間しか残っていませんでした。魂の苦悩の中で、彼は叫びました。「おー、神よ、私が死ぬ前に、汝を現わしたまえ」。

その晩、彼は眠りました。眠っているときに、彼は夢を見ました。その夢の中でイエス・キリストが現われ、ヒンズー語で彼に語りかけました。「おまえは正しい道を知ろうとして祈っている。なぜその道をとらないのか。私とその道である」。その晩、サンダーはクリスチャンになりました。彼は言っています。「私はイエスの他にだれにも仕えることはできない」。

イエスと出会った瞬間から、彼は変わりました。彼の絶望は去りました。彼は人生の目的を持つようになりました。キリストに仕えたいという彼の願望から、彼を引き離すものは何もありませんでした。嘆願も、富の提供も迫害でさえも彼を引き離すことはできませんでした。彼の家族は彼を勸当し、彼を毒殺しようとしたが、彼は回復し、逃げました。彼は洗礼を受け、残りの生涯をキリストに仕え、人々を助けることにあてました。独身で神秘家であるため、彼は他のクリスチャンから変わった奇妙な人と思われました。しかし、実際は、彼は造り変えられた人であり、最悪の迫害を通して、彼はイエス・キリストの力を証しました。彼が死んだ日はわかっていません。彼を最後に見て、彼のことを聞いたのは1929年でした。その年に彼は、禁じられたチベットの国にイエスの良い知らせを伝えるために入ろうとしたのです。インド政府は1933年に、彼はおそらく死んだであろうと発表しました。彼の熱心な弟子としての生涯は、キリストによって個人生活にもたらされる、変えられた生涯の良い模範です。

ニ・トシェング（中国）

ニ・トシェングは1903年、中国で、無理矢理に結婚させられた奴隷の女のもとに生まれました。その結果、彼はとてもつらい少年時代を送りました。18歳のとき、彼はイエス・キリストの人格に直面しました。ニ・トシェングは彼をそのまま受け入れました。何か特別な方法によったのではありません。この意志の働きによって、彼は生涯まったき従順をもってキリストに従うために献身しました。彼の献身の理解は、ささげることと自己犠牲に満ちた彼の生涯に見られます。

信仰の故に受けた迫害の苦しみと投獄の逆境にもかかわらず、彼は彼の民に仕えました。彼は、もはや伝えることも教えることもできなくなると、書くことに移りました。アジア以外のクリスチャン社会では、今日ニ・トシェングをウオッチマン・ニーとして最も良く知っています。彼は霊的生活、教会、献身、他の霊的テーマについて多くの本を書きました。

彼は1972年、69歳のとき獄中で死にました。多くの苦しみに耐えたということ以外は、獄中での彼の20年間についてはほとんど知られていません。彼の好きな言葉はこういうものでした。「私は自分のためには何もほしくない。私は主のためにすべてのものがほしい」。確かにこの東洋の殉教者の生涯は、クリスチャンにとって信仰を振り立たせられるものでした。それはまったく、献身したクリスチャンがどういうものであるかを証明しています。ウオッチマン・ニーの回心には、それを確認する外側の異常なしるしは何もなかったようでしたが、変えられた生涯とあらゆる逆境に実践された高い理想は、イエス・キリストとの真の出会いの証拠です。

C・S・ルイス（英国）

C・S・ルイス（1898-1963）は、今世紀最も良く読まれているクリスチャ

ン作家のひとりです。彼は大英帝国で生まれ育ちました。彼はオックスフォード大学を卒業し、のちにオックスフォードのマグダレーン大学の特別研究員となり、ケンブリッジ大学で中世とルネッサンス文学の教授になりました。

ルイス教授は、キリスト教の信仰を最もむずかしい知的テストにかけてから初めてクリスチャンになりました。彼が彼の存在を確信するに至ったのは40歳のときでした。

『喜びのおとずれ』（1955年）は、彼の霊的自叙伝で、「1つには私がどのように無神論からキリスト教に移ったかを語るように頼まれて」書いたものでした。最初ルイスは無神論者でした。そのあとで探究の時代が続きました。彼はいろいろな宗教を調べました。神殿売春、奇怪な風習、残酷さを見ました。その結果、彼はキリスト教のような歴史的主張をもった宗教は他に1つもないと感じるところまで来ました。それでも、ルイスはまだ神を非人格的なものと考えていました。またイエス・キリストの必要と目的を見るところまでは来ていませんでした。彼は教会に出席し始めました。そういう考えは、彼には面白くないことでしたが……。まもなく彼は、もし神が本当に存在しているなら、その神は愛したり、感じたり、人に手をさしのべたりすることのできる能力をもった神にちがいないことがわかり始めました。その頃、キリストの受肉を含むキリスト教の完全なメッセージが意味をもってきました。彼はそのことをこのように言い表わしています。「あらゆる時代のこの時点においてのみ、神話は事実にならねばならなかった。肉体をとられた言葉、神にして人である。これは〈宗教〉ではない。〈哲学〉でもない。それらすべてをまとめたものであり、現実化したものである」。

彼はキリストとの出会いを、非常に個人的な言葉で説明しています。それは強烈な感情的経験でもなければ、彼が以前考えていたようなものとも違っていました。事実、彼は言っています。「私が見いだしたものは、私が求めていなかったものであった」。しかし、とにかく「最後のステップがとられて」、C・

S・ルイスはクリスチャンになりました。

後年、彼は文学批評の畑で常に卓越しており、『喜びのおとずれ』以外の多くのキリスト教「古典」を書き表わしました。キリスト教思想に関する何冊かの本の1つである彼の『キリスト教の精髓』は、第3課で推薦しておきました。彼の『悪魔の手紙』と宇宙3部作（『沈黙の惑星を離れて』『パレランドラ』『かの忌わしき砦』）は、世界的に有名です。現代の神話である『ナルニヤ物語』のような子供向けのシリーズでさえも、大人におもしろい読み物です。彼の友人であるJ・R・R・トルーキンやドロシー・L・セイヤーズと共に、ルイスは、学者であり芸術家であってもクリスチャンになれること、またこのことは彼の知性と創造的才能を破壊しないで、かえって高めることを証明しています。

ルイスは真理の誠実な探求を表わしています。彼は、神に向かっている宇宙において、誠実な探求者は真理を見いだせることを確信しました。

「私が経験で気に入っていることは、経験が正直なものだという点である。あなたは多くのまちがった道をとるかもしれない。しかし、目を見開いてい給え。そうすれば、警告のサインが現われる前に深入りするようなことを許されないだろう。あなたは自分を欺くかもしれないが、経験はあなたを欺こうとはしない。宇宙は、あなたがそれを十分にテストするたびに真理を鳴り響かせる」。

これまでのクリスチャンの回心の経験例は、ある人にとってイエス・キリストとの出会いは急激で感情的に高まるものであったが、他の人にとってはゆるやかで静かに認められたものであることを示しています。イエス・キリストのことを示されたとき、すぐ信じることのできる人がいます。決断の助けに超自然的証拠が与えられた人もいましたが、知的論証によって信仰に近づかなければならない人もいます。大切なことは、これらの人々は他の多くの人たちの代

表であり、例外なくイエス・キリストに出会って彼を見いだし、期待が充足されたということです。

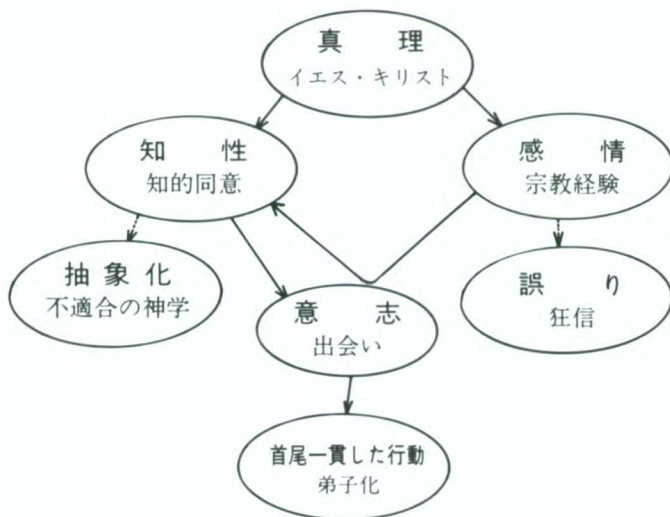
意志の人

真理の探求（ルイスが「経験」と呼ぶもの）は、究極的にイエス・キリストとの出会いに導くことを、C・S・ルイスは確信していました。私も確信しています。問題はしばしばそこに至るまでの知的不誠実です。しかし私は、このコースのこのところまであなたが来ているということは、あなたが真理を見つけ次第、真理を心から受け入れる状態にあると信じています。さらに、真理に立って心から行動する準備ができていると、私は信じています。序言で、私は3種類の人をあげました。知性の人、感情の人、意志の人です。私たちはみな、これらの特徴を私たちの中に持っています。最初の2つのタイプの欠点は、彼らが他の人たちの重要性を無視するか認めようとしないことです。知的な人は感情の有効性を受け入れず、非合理の要素が加わる宗教的経験の妥当性を受け入れようとしません。感情的な人は物事を深く考えるために自己を訓練することをしないで、理性的アプローチにがまんができないために、経験と一致する客観的実在を見いだすことができないまま、彼自身の宗教経験に達することがありません。

それでは、私が知的で献身的なクリスチャンと同一視している意志の人はどうでしょうか。彼は知的側面と感情的側面を統合し、意識的な選択によってそれを乗り越えて前進します。もし彼が本来、感情的なレベルで（パウロのように）スタートするなら、彼は彼の経験を知的探求の厳しさに従わせることができます。ピノックが言っているように、「心は理性が偽りとして拒むものを喜ぶことができない」（マクドゥエルより引用、P.3）。もし彼が知的レベルから始めるなら（エチオピアの役人のように）、彼は単なる言葉の同意を超えて進

む用意があります。その同意は、単なる知的理解として最も低い信仰のレベルです。意志の人は彼が理解した真理に立って行動します。

イエス・キリストの最初の弟子たちは、「すべての民に好意を持たれました」（使徒2：47）。彼らは首尾一貫した行動に進みました。彼らがイエスについて知ったことと、彼らが地をふるわせたペンテコステの経験で感じたことは（完全な記事は使徒2：1—42までを読んで下さい）、彼らの意志によって統合され、他の人が理解でき認識できたような外側の行動となって現われました。もしそれが純粹であるなら、回心の出会いの経験は真理と一致した、また真理からあふれたライフ・スタイルとなります。そして、真理は私たちが会おうお方その人です。下図はクリスチャンの回心と、クリスチャンが弟子化と呼んでいる首尾一貫した行動の伴った新しい生活を示すものです。



クリスチャンは感情的経験に頼る幼稚な熱心家でもなければ、現実生活と無関係な規則を言葉だけで同意する知的小人でもありません。クリスチャンはイエス・キリストに出会った人であり、キリストの要求を理解し、受け入れて、新しい違った視点を与えられた人生に歩み出した人です。クリスチャンはすべ

での答えを持っているなどとは主張しません。また、瞬間的に完全になった者でもありません。彼は解決できない問題の答えを捜し続ける人であり、神の助けによって、神に喜ばれない性格に働きかける人です。クリスチャンは理想と実際を1つにしようと努力します。また、首尾一貫した行動のパターンを発展させようとします。クリスチャンにとって、信仰と存在と行動の真理は、みな同じ客観的実在、すなわち主イエス・キリストのうちに見いだされます。統合された首尾一貫した生活は、主イエス・キリストに似る中で実現されます。

挑戦

第1課で、私はあなたにこの本の学びを最後までやりぬくように挑戦しました。あなたはやりぬいたのです。第2課と第3課では、真理を求めているあなたが助けられるために、神にその助けを祈り求めるように、またキリストがあなたに現わされるようにチャレンジしました。第4課では、新約聖書を読むようにというチャレンジでした。

さて、最後の最も大切なチャレンジが来ました。今まで以上のチャレンジです。今まではあなたの時間、あなたのプライド、あなたの過去の偏見に対するチャレンジでした。さて、私は今、あなたがイエス・キリストを受け入れるようチャレンジします。イエス・キリストにつながるよう、彼の人生を変える力に出会うよう、新しい歩みと新しい人生の方向をとる決心をするよう、あなたにチャレンジします。

しかし、決断の出会いには、そこに入る前に、その意味するところを理解することが大切です。英国聖公会の牧師、フランク・コルクホウンは、『完全なキリスト教』という有益な本を書きました。その中で彼は、クリスチャンであることは4つのことを伴う、と言っています。第1は、イエス・キリストとの人

格的出会いの経験、あるいは彼の言葉によればコミットメント（献身）です。私たちはこの課で、キリスト教のこの面をやや広範囲にあつかいました。第2は、共同体ないしは参加です。これは他のクリスチャンたちや一般の人々に入っていくことです。ここで、クリスチャンたちが地域で集まることが重要な役割を演じます。教会は、不完全であるにもかかわらず、キリストのからだです。ですから、私たちはそこに加わらなければなりません。第3は、信条ないし信仰体系です。私たちの態度や行動のためには、健全な理性的で霊的な基盤がなければなりません。教義、神学、具体的信仰個条は、私たちの経験や献身に対して心の支えを与えなければなりません。第4は、行為もしくは倫理です。私たちはクリスチャンとして新しい主人に仕えます。私たちは彼に対して道徳的で霊的な責任があります。真面目なクリスチャンは、信仰の告白と矛盾しない特定のライフ・スタイル、道徳パターン、行動様式を持っています。

こうして、＜トータル（完全な）＞クリスチャンになるためには、コミットメント（個人的宗教経験）と共同体（教会加入）と信条（聖書と私たちの知性を用いることに基づいた信仰体系）と行為（人生の倫理）が必要です。このような信仰はなま易しいものではありませんが、まちががなく最善の道です。それは個人的であって社会的です。経験的であって理性的です。それは私たちの存在の全領域に与えられます。

どのようにしてイエス・キリストを受け入れるのでしょうか。どうしたら彼に出会うことができるのでしょうか。どのようにして回心の経験を持ち、調和のとれた首尾一貫した生活を送ることができるのでしょうか。これは秘策ではありませんが、あなたが神に向かって進み出すことのできるいくつかの示唆です。聖書はあなたに保証しています。あなたが神の方向に進みさえすれば、神は今すぐにもあなたに会おうとしておられることを。「もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つかるだろう。わたしはあなたがたに見つけれられる。——主の御告げ」（エレミヤ29：13、14）。

神に向かうステップ

1. 自分には心の調和と平安を得る能力がないことを認める。あなたは神の律法を破ったこと、あなたは罪人であって助けを必要としており、願っていることを認める（ローマ3：23）。
2. イエスが「道であり、真理であり、命である」（ヨハネ14：6）こと、従ってイエスはあなたを助け、平安を与えることのできる唯一のお方であることを認める。また、イエスの生涯と死と復活は、あなたがゆるしと新生を受けるための唯一の手段であることを知る（使徒4：12）。
3. イエスに来てもらって、きよめられ、ゆるされ、変えられ、新しい命を与えられて新しくされることを求める（Ⅱコリント5：17）。
4. あなたの意志を働かせることによって、あなたの全生涯をイエス・キリストにささげ、あなたの人生を今まで考えてもみなかったほど美しいものにしてもらうように助けてもらう。イエスに従うことを決心する。それは、あらゆることにおいて彼に喜んで従い、彼を第1にすることを意味している。
5. 祈りによる約束、聖書を読み、礼拝の場所を見いだすことによって約束を実行する。献身をつらぬき、聖書に従って洗礼を受け、主の晩さんにおいて他の献身的なクリスチャンの仲間に入る。
6. 最後に、効果的なクリスチャンを目標としてⅡペテロ1：5—8の教えに従って、イエス・キリストにある新しい人として成長し続ける。

出会いの意味するところ

もしあなたが、これらのステップをゆっくりと、誠実に、慎重にふんで行くなら、神の聖霊はそれらをあなたの個人的な経験の中で、現実的で重要なものとしてくれるでしょう。

もしあなたが人生にイエス・キリストを受け入れる選択をしたなら、その新しい信仰の道を歩み続けるようおすすめします。以前、私は大学生のために聖書研究を指導していたことがあります。講義の最中に、ひとりの女子学生が手をあげて私に個人的な質問をしました。それは彼女が単なる「教養的クリスチャン」ではなく、献身的なクリスチャンになることを決心した数週間前のことでした。さて彼女は、新しい決心の結果、ある疑問と問題にぶつかりました。彼女の質問はこうでした。「あなたは聖書や、イエスや、キリスト教について、今まで疑いや問題を感じたことはありませんか」。

私は即座に答えました。「はい、もちろんありますとも。でも私はクリスチャンとして、外側に立つ人の視点でなく、内側に立つ人の視点で問題に近づきます。私は絶対、聖霊を確信しています。イエスは、聖霊は私たちをあらゆる真理に導かれると言われたが、聖霊はその約束を現わしてくださることを確信しています。私は自分も持っている問題が全部解決するのを待って信仰を持つとは思いません。クリスチャンにとって、信仰が最初に来て、理解はいつもそのあとからついてくるものです」。

神学校の教授がこう言ったことがあります。「適切な質問は半分解決された問題だ」。文字通り、これはほんとうのことです。私たちは適切な質問をする必要があります。このコースは問題を提出し（少なくともいくつかの問題を）、あなたに正しい方向を指し示そうとしてきました。

私は自分の経験から、クリスチャンには喜びがあるとあなたに言うことができます。それは単に、週末の旅行ではありません。それは一生の旅路です。それは小説を読むようなものではありません。事実を経験することです。それは退屈な世界にただ存在しているだけというものではありません。それは爽快な山登りです。それは世の中から逃避して幻想の世界に入ることはありません。人生を直視することです。スタジアムにすわることはありません。競技場に入って行って参加することです。このような人生は、出会いへの招きを受

け入れるあなたのためにあるのです。

注意：このコース中の指示に従ってスチューデント・インタラクションを完成することを忘れないで下さい。インタラクションAはコースの内容を復習するためのガイドです。自己採点復習の内容に特に注意して、試験のため備えて下さい。インタラクションAを完成させたら、指示通りに郵送して下さい。

あなたはコースを完了しましたから、インタラクションBでのあなたの見解は、特に価値あるものとなります。正直に最後まで空白に書きこんで下さい。それによって私たちは、あなたが何を必要としているかを知って、補助的な参考書であなたを助けることができるようになるでしょう。

インタラクションCは、イエス・キリストとの出会いにおけるあなたの立場を記録したり、個人的なコンタクトを依頼することへの招きであることを思い出すでしょう。強制的ではありませんが、インタラクションCへのあなたの応答を心から待っています。

引用参考書——第5課

- 1 . Clark, Walter Houston, *The Psychology of Religion*. (宗教の心理学) New York, New York, USA: The Macmillan, Company, 1958.
- 2 . Colquhoun, Frank. *Total Christianity*. (完全なキリスト教) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1965.
- 3 . Davery, Cyril J. *Sadhu Sundar Singh*. (サドー・サンダー・シング) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1963.
- 4 . Hallesby, O. *Why I Am a Christian*. (私はクリスチャン) London, England: Inter-Varsity Press, 1968.
- 5 . Johnson, Paul E. *Psychology of Religion*. (宗教の心理学) New York, New York, USA: Abingdon Press, 1959.
- 6 . Kinnear, Angus I. *Against the Tide*. (潮流に抗して) Eastbourne, England: Victory Press, 1973.
- 7 . Knox, R. A. *Enthusiasm: A Chapter in the History of Religion*. (熱心：宗教史の1章) Oxford, England: Clarendon Press, 1973.
- 8 . Lewis, C. S. *Surprised by Joy*. (喜びのおとずれ) London, England: Collins Fontana Books, 1973.
- 9 . MacDowell, Josh. *Evidence That Demands a Verdict*. (判決を要求する証拠) San Bernadino, California, USA: Campus Crusade for Christ, Inc.,

1972.

10. Pinnock, Clark. *Set Forth Your Case*. (あなたの事例について) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1973.
11. Ramm, Bernard. *Protestant Christian Evidences*. (プロテスタント・キリスト教の証明) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1966.
12. Strunk, Orlo. *The Choice Called Atheism*. (無神論の選択) Nashville, Tennessee, USA: Abingdon Press, 1968.
13. Tournier, Paul. *The Meaning of Persons*. (人格の意味) New York, New York, USA: Harper and Row, Publishers, 1965.

今後の学びのために

Allport, Gordon W. *The Individual and His Religion*. (個人と宗教) New York, New York, USA: The Macmillan Company, 1960 (paperback edition).

宗教の心理学的解釈として、この本全体が有益。特に5章、6章は疑いと信仰の性質についてすぐれている。

Baillie, John. *Invitation to Pilgrimage*. (旅路への招き) London, England: Penguin Books, 1960.

この本の対象は「クリスチャン不可知論者」、すなわち、名前だけはクリスチャンであるが、信仰とか経験においてはクリスチャンでない人である。著者はこのような人に対して、はっきりではあるが同情をもって語っている。

Colquhoun, Frank. *Total Christianity*. (完全なキリスト教) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1965.

英国教会の牧師がクリスチャンとは何かを力強く書いたもの。新しいクリスチャンとクリスチャン生活に必要なことを知りたいと願っている人に安心して推薦できる。

Davery, Cyril J. *Sadhu Sundar Singh*. (サドー・サンダー・シング) Chicago, Illinois, USA: Moody Press, 1963.

偉大なインドのクリスチャン神秘家の自伝で、その生涯の概要はこの課にあげておいた。

Edman, V. Raymond, editor. *Crisis Experiences*. (危機の経験) Minneapolis, Minnesota, USA: Dimension Books, Bethany Fellowship, Inc., no date.

この96ページの本は、主にアメリカと英国の9人の著名なクリスチャンの生涯の経験を詳しく語っている。雑誌記事のシリーズから再版したもの。

Hallesby, O. *Why I Am a Christian*. (私はクリスチャン) London, England: Inter-Varsity Press, 1968.

このすぐれた本の中で、ハレスビー教授は、キリスト教に対する反対や疑いに対して、彼自身の生涯の例から答えている。

Kinnear, Angus, I. *Against the Tide*. (潮流に抗して) Eastbourne, England: Victory Press, 1973.

これはウオッチマン・ニーの感動的な物語である。注意深く調べて良く書かれた、すぐれた自伝である。

Kitwood, T. M. *What Is Human?* (人間とは何か) London, England: Inter-Varsity Press, 1970.

著者は人間の3つの見方を論ずる。ヒューマニスト、实在主義、クリスチャンである。「完全なキリスト教信仰の道を見いだしていない」人に、最初の2つの哲学を簡潔に評論して書いている。

Lewis, C. S. *Surprised by Joy*. (喜びのおとずれ) London, England: Collins Fontana Books, 1973.

今世紀最大の創造者、刺激的クリスチャン作家のひとりの自伝。霊的意味を探究した道をたどって、いかにその意味をイエス・キリストのうちに見いだしたかを示そうとしたもの。ルイスの本はどれも読む価値がある。

Little, Paul E. *Know Why You Believe*. (なぜ信じているかを知りなさい) Downers Grove, Illinois, USA: Inter-Varsity Press, 1971.

すぐれた本である。特に12章はここで論じられた主題に関連する。「キリスト教経験は妥当か」という題はこの章からのもの。

自 習

- 1 以下の聖書を読みなさい。ロマ書3：21—23, 6：23, 10：8—13, ヨハネ1：12, 第1ヨハネ1：9, これらの聖句に基づいて, クリスチャンの回心を考える際に重要な以下の各言葉について, 簡単に説明しなさい。

罪

告白

信仰

神の子

- 2 この課で話した「潜在潜伏」の概念を考えなさい。あなたの生涯に起こったことで, キリスト教とこのコースを考える上で影響力を与えた事柄をいくつかあげることができますか。

.....

- 3 私が説明したような生き方をしたクリスチャンの例を知っていますか。もし知っていれば, あなたのために彼らの信仰の生涯の主な特徴をあげなさい。

.....

- 4 もしあなたが今クリスチャンになりたいと思うなら、なれます。イエス・キリストに願って、あなたが犯したあらゆる悪い行ないを許していただき、神に受け入れていただきさえすればよいのです。友だちに話すように祈って下さい。もうそのように話しているでしょう。なぜあなたはキリストを受け入れたか、その理由を下に書いて下さい。

.....
.....
.....

- 5 悔い改めと告白の祈りを始めるのに助けが必要なら、以下の例を用いて、そのあとに自分の言葉で祈って下さい。

「主イエスさま、私はあなたが必要です。私の生涯と未来をあなたにささげたいと願っています。私の悪い行ないと欠点のすべてを許して、私の人生をきれいにして下さい。私を神の子として、あなたの栄光のために毎日生きることができるよう助けて下さい。あなたを私の人生の主として迎え入れ、私の存在の中心とします。聖霊を送って、私を導き、力づけ、強めて下さい。イエスさまの御名によって祈ります。アーメン」。

祈ったあとどういう気持ちでしたか、この祈りがあなたの人生にどのような効果をもたらそうとを感じるかを書いて下さい。

.....
.....
.....
.....
.....
.....

自習のガイドライン

- 1 罪——すべての人は罪を犯した。罪の結果は死である。罪は赦される。

告白——もし私たちが罪を告白するなら（認めて悔いるなら）、イエスは私たちを赦して下さる。もし私たちがイエス・キリストを告白するなら（言葉の2番目の意味である、認め宣言するなら）、私たちは罪の結果から救われる。

信仰——信仰は心（意志）の問題であり、神の前に恥と罪を感じさせないで立たせ、私たちを神の前ですべて平等とし、さらに神に似る者（神の子として）となる力を受けるための手段となる。

神の子——神の子となることは、イエスを主と受け入れ、彼を彼が言われたお方として信じることによって実現する。しかし、それはまた、1つの過程であって、それによって神の力が私たちを神の像に変化させ、私たちは「神の家族として似る者」となる。

- 2 あなたの答え。あなたの個人的な必要（友だち、人生の方向、赦しなど）と、知的で献身的なクリスチャンとの接触をはっきりあなたに示した出来事にふれること。
- 3 あなたの答え。多分そういうクリスチャンは、関心、首尾一貫性、献身といった特質を示すであろう。
- 4 あなたの答え。今あなたは赦しの必要を覚え、この必要を満たすのはキリストの力だけであることを知っているでしょう。おそらくあなたは、無意味な人生にあきて、イエスが与えてくれる新しい命と目的を望んでいるでしょ

う。おそらくあなたは、自分が真理を求めてきたので神はご自身を自分にだんだん示しておられることに気がついているでしょう。

5 あなたの答え。

自己採点復習質問

- 1 エチオピアの役人とサウロの回心経験を学んだあと（使徒8,9章）、出来事と人物を組み合わせ、年代順に番号をふって下さい。例——x—1, y—1, y—2……
- | | | | |
|---------|----------------------|----|--------|
| a | いやされて洗礼を受けた | x) | エチオピア人 |
| b | 幻の中でイエス・キリストと出会った | y) | サウロ |
| c | 信仰の証拠に洗礼を受けた | | |
| d | 神を喜ばせるためにクリスチャンを迫害した | | |
| e | クリスチャンからの説明を受け入れた | | |
| f | 光を見、声を聞いた | | |
| g | 聖書でイエス・キリストに出会った | | |
| h | イエスを神の子と信じる信仰を宣言した | | |
| i | イエスに従順に従った | | |
| j | 真理を求めて聖書を調べた | | |

思考の刺激：あなたは、ここで見られる出会いと応答の基本的要素を、友情が芽ばえることの中に見ることができますか。今までひとりぼっちであったのが、だれかに会い、引きつけられていったなど。あなたにとってパターンがありますか。あなたはこれをイエス・キリストとの関係に関連づけることができますか。

- 2 クリスチャンの回心は各人にとってユニークな経験である。以下の項目の中で、回心した者に特別な、あるいは異常な要素は何か。また、普通の要素は何か。異常なものにはNを、普通のものにはUを書き入れなさい。
- | | |
|---------|------|
| a | 幻を見る |
| b | 潜在潜伏 |

- c 不安な時期
- d 霊的実在の探求
- e 泣くことと体をふるわせること
- f イエス・キリストの必要を認める
- g 生命の激流を感じる
- h 不思議と心温まる
- i キリストから新しい命を受け入れる
- j 新生経験をすること
- k 瞬間的に麻薬から解放される
- l 以後イエスに従うことを決心する

思考の刺激：クリスチャンの回心とあなたのこれまでの激しい個人的経験とどう違うのでしょうか。それらの違いをあなたはどのように考えますか。

3 回心の例にとりあげられた人たちには、生涯いくつかの特徴がある。該当する人名を空白に書き入れなさい。だれもあてはまらない場合は×、すべての人にあてはまる場合は○を書きなさい。

- | | |
|---------------------|--------------|
| a 知的疑い | 1) オー・ハレスピー |
| b 神を必死に求める | 2) サンダー・シング |
| c 知的ごう慢 | 3) ウオッチマン・ニー |
| d 献身と奉仕 | 4) C・S・ルイス |
| e 真理への心からの願望 | |
| f 迫害化の忍耐 | |
| g 新しい目的 | |
| h 実行に移された高い理想 | |
| i 人生への逃避 | |
| j 顕著な学問 | |

思考の刺激：あなたの人生に目立つ特徴を考えなさい。どのような否定的性質をあなたは克服したいですか。どのような肯定的性質をのばしたいですか。

4 信仰の種類とそれにふさわしい信仰のレベルを表わす専門用語と、その定義を組み合わせなさい。用語と定義の番号を書きなさい。

- a + 言葉としての信仰
- b + 理解としての信仰
- c + 行動としての信仰
- d + 統合としての信仰

- | | |
|---------------|----------------------|
| 1) 行動の現われ | 5) 首尾一貫した態度に実行される言葉に |
| 2) 理解の伴う統治 | 表わされた理解の伴う確信 |
| 3) 知的理解 | 6) ライフ・スタイルから分離された言葉 |
| 4) 刺激と反応の言語表現 | 7) 行動に示された理解 |
| | 8) 行動と分離した理性的信仰 |

思考の刺激：いろいろな時、いろいろな物事に対して、私たちはみな信仰の異なる段階を持っている。あなたの生涯に現われた各段階を見て、あなたが過ごした時間量とあなたが持った信仰の段階との間に相関関係があるかどうか自問してみてください。

5 意志の人の概念と一致する項目を○で囲みなさい。

- a) 感情的経験を求める
- b) 真理の出会いを求める
- c) 感情的経験を知的探求に服従させる
- d) 感じて理解した真理に立って行動する
- e) 感情の伴った経験を拒絶する
- f) 信仰と経験を調和した行動の中で1つにしたいと思う

- g) 宗教への理性的アプローチにがまんできない
- h) 感情の有効性を受け入れる
- i) すべての答えを持っていると主張する
- j) イエス・キリストにつながることを選ぶ

思考の刺激：人間の精神の中で、知性と感情と意志ははっきりと分けることがむずかしい。しかし、あなた自身本来「知性の人」か「感情の人」か、また「意志の人」になる準備があるか考えてみなさい。

自己採点復習解答

1 a y-5	3 a 1), 4)
b y-3	b 2)
c x-5	c ×
d y-1	d ○
e x-2	e 1), 2), 4)
f y-2	f 2), 3)
g x-3	g ○
h x-4	h 3)
i y-4	i ×
j x-1	j 1), 4)
2 a N	4 a 4) + 6)
b U	b 3) + 8)
c U	c 1) + 7)
d U	d 2) + 5)
e N	
f U	5 b), c), d), f), h), j)
g N	
h N	
i U	
j U	
k N	
l U	

- a 聖書は個人に与えられた名前を重要視している。「聖書において、名前は一般的に人格と彼の立場、彼に影響を与えたある状況と、彼が抱いた希望等を表わしていた。従って、『名前』はしばしばその人自身を意味するためにつけられた」(国際標準聖書辞典、「名前」の項)。ある状況や神との出会いにおいて、人間が根本的に変わるとき、彼は新しい名前をつけるか受けることは異常なことではなかった。聖書にはこの例が多くある。第3課でイエスがシモンの名前をペテロに変えたことを思い出しましょう。
- 現代の心理学者の一致した見解によると、名前は自己の象徴となっており、気に入った名前は自信と自尊心を奮い立たせるが、めずらしい、恥ずかしくなるような奇妙な名前は、自己評価に関して心理的問題を助長する。
- b この記事が使徒パウロの記事の直前に置かれていることに注意せよ。このように、使徒の働きでは、2つの非常にはっきりとした、しかも非常に違った回心経験が並んで存在している。
- c パウロの回心経験はすでに引用した。しかし、彼はクリスチャンとして捕われた後の弁護の一部として、再び彼の経験を語った。使徒22：1—21と26：1—23を見て、9：1—25と比較すれば、パウロとイエスとの出会いと、その出会いが彼の生涯に及ぼした結果の全体像がわかるであろう。
- d クラークは「信仰」をイエス・キリストとの出会いに関して、私が「宗教経験」について話したときと同じ意味で用いている。今は非常に短く、イエス・キリストを信じる信仰の宗教経験を説明するのに、私は「回心」という言葉を使います。この回心がクリスチャンになる前提である。
- e これらの4つの段階は、クラークの本のP.220—224に論じられている。私の彼の基本線を用いて、主に信仰の心理的側面を問題にしたのだが、その基本線に私自身の考えを補足している。
- f 第1課の真理をテストする規準を覚えているだろうか。第1課の「統合された首尾一貫性」のところを見返すとよいでしょう。
- g 以下の各証しは自叙伝(ハレスピー、ルイス)か伝記(サンダー・シング、ウォッチマン・ニー)からとっている。どれも、1つの資料からとられたもので、それは最後の「引用された参考書」にあげてある。ページの引用は省略した。

出会いへの挑戦

1985年12月25日 第1版発行©

著者 ジェリー・サンディッジ
翻訳者 菊山和夫
発行所 国際聖書通信学院
〒170 東京都豊島区駒込3-15-20
印刷所 新生運動
〒352 埼玉県新座市石神1-9-34

落丁・乱丁の際はお取り替えいたします。

